

強欲傾向（Greed）と要求水準（Level of aspiration）の関係についての検討

笥 良一

（広島大学教育学部第五類人間形成基礎系心理学系コース）

問題

食欲、性欲など欲は私たちの日常の中に何かしらの形で必ず存在するものであるが、強すぎる欲は強欲とされ、キリスト教の七つの大罪の一つや、仏教の三毒の一つに数えられ、社会的または宗教的にも好ましくないものとされてきた。

心理学における強欲は、Seuntjens ら (2015)が「常に何かを求め続け、決して満足しない傾向」と定義した。また、同研究において強欲は他者操作性、衝動性、浪費傾向、妬みなどと正の相関が、自尊感情、共感性、人生の満足感などと負の相関があることが示された。しかし、強欲のポジティブ側面を検討している研究はまだほとんど行われていない。

増田ら (2018)では、強欲傾向と良性妬みに正の相関がみられたことから、強欲傾向が課題の目標を高め、課題の結果を引き上げる効果がある可能性を考察している。そこで本研究では、強欲傾向と課題に対する主観的達成目標である要求水準との関連を実験により検討し、強欲傾向のポジティブ側面を検討することを目的とする。

方法

参加者 大学生 41 名 (平均年齢 19.9 歳 $SD=1.86$ 男性 10 人, 女性 31 人)

装置 5 種類のコインと、そのコインに対応した穴が開いている箱を用意した。

手続き 事前に尺度を測定した後に、実験室での実験課題を行った。課題は用意してあるコインを 30 秒間でできるだけ多く箱に入れるというものだった。練習試行を 1 試行、本試行を 10 試行行った。参加者は各試行の前に目標枚数を、後に実際に入れたコインの枚数を入力し、さらに数直線上で各試行での結果に対する満足度を示した。全試行終了後、参加者は総合的な満足度と内省報告を入力し、実験を終了した。

結果

10 試行分のデータを前半と後半に分けて強欲傾向との相関分析を行った (Figure 1)。相関分析

の結果、前半と後半の両方において、目標、結果、満足度、達成差（結果から満足度を引いた値）に類似した関係が見られた。強欲傾向との関連については、前半において達成差と有意傾向の正の関連が見られた。後半について同様の結果は見られなかった。

以上のことより、今回の課題で強欲傾向にある人ほど前半の結果が目標を上回っている傾向にあったと言える。

	前半目標	前半の結果	前半の満足度	前半の達成差	強欲傾向
前半目標	1.000				
前半の結果	.755**	1.000			
前半の満足度	-.385**	-.040	1.000		
前半の達成差	-.782**	-.182**	.539**	1.000	
強欲傾向	-.221**	-.048	.086*	.284**	1.000
	後半目標	後半の結果	後半の満足度	後半の達成差	強欲傾向
後半目標	1.000				
後半の結果	.696**	1.000			
後半の満足度	-.273*	.019	1.000		
後半の達成差	-.645**	.101	.398**	1.000	
強欲傾向	-.046	-.006	.044	.056	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 1. 前半と後半の相関分析の結果

考察

実験の結果、今回の課題では強欲傾向は課題の目標には影響を与えていないことが示された。考察できる理由としては今回の課題環境が参加者 1 人のみの状況で行われる環境であり、課題の目標を立てる際に内的な動機付けのみ働くような状況であったことが考えられる。先行研究では他者と 2 人で行う分配ゲームにおいて、強欲傾向の人は利己的な選択を行う割合が高く、他者に利己的な選択をされた場合はそれを拒否する割合が高いことが示されている (Seuntjens ら, 2015)。今回の結果と先行研究の知見を踏まえると、強欲傾向の人は課題に対する報酬や他者がいるような状況において、それがない状況よりも高い報酬を得ることや、他者よりも高い結果を得ることに積極的になるような特性が強い特性である可能性がある。今後は今回と同じ条件で報酬や他者を絡めたうえで検討が必要である。